

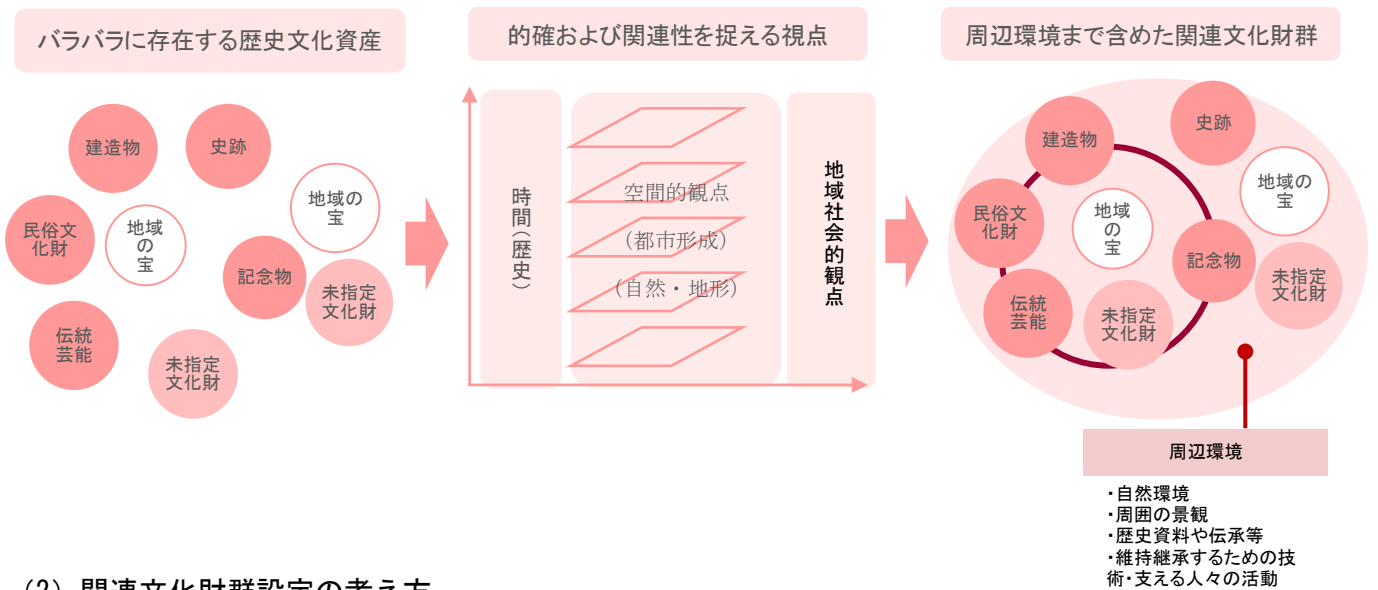
第4章 札幌市の関連文化財群

1. 関連文化財群設定の考え方

(1) 関連文化財群の考え方

本来文化財とは、文化財単体で成立し価値を形成しているものではなく、他の要素と密接な関係を持ちながら形成し、継承されてきたものです。文化財本来の価値を適切に保全するために、有形・無形、指定・未指定に関わらず、様々な文化財の歴史的・地域的関連性(ストーリー)を整理し、関連文化財群としてとらえることで、文化財について市民へ分かりやすく伝えることができ、文化財への理解を深めることに繋がります。

また、関連文化財群とは歴史的・地域的関連性(ストーリー)に基づく文化財だけではなく、周辺環境(資産を物語り・繋げるもの、支え維持・継承する仕組み)も含めて捉えることが重要です。



(2) 関連文化財群設定の考え方

札幌市の関連文化財群を設定するにあたっては、広域にわたる札幌市において、多面的・多角的な視点により札幌の歴史文化資産の特徴を捉え関連する文化財を見つけるため、前述のように地域的・歴史的・空間的観点から札幌市の「特徴」を整理します。こうして抽出された、札幌市の歴史文化を物語るうえで欠かすことのできない「特徴」に関連するものの集まりを関連文化財群として設定します。

◆札幌市の関連文化財群とは

- ・歴史的関連性・地域社会的関連性・空間的関連性から見出すもの
- ・札幌市の歴史文化を物語るうえで欠かすことのできない「特徴」に関連する文化財の集まり
- ・札幌市の歴史文化の特徴をよく反映したものであること
- ・市民が誇りだと感じるものであること
- ・関連する文化財が無形、有形とも多く見出されていること

市民ワークショップ結果やアンケート結果、策定委員会での意見を受け、札幌市の歴史文化の特徴から導かれた関連文化財群のストーリーの例を以下のように整理します。なお、そのうち赤枠の関連文化財群のストーリーについては、本構想において札幌市の関連文化財群として設定するため、次頁より詳細を記載します。

札幌市の歴史文化の特徴		関連文化財群のストーリー（例）
札幌市を代表する歴史文化の特徴	1) 札幌の豊かな地形・地質が育んだ自然と人々の営み	1) -1 先人たちの生業と食を今に伝える丘珠縄文遺跡
		1) -2 札幌の特異な自然形成と居住地の関係
		1) -3
	2) 藻岩山や豊平川に代表される豊かな自然と今に継承されるアイヌの精神	2) -1 アイヌ語地名が今に伝えること
		2) -2 人から人へ大切に継承される歌や踊り
		2) -3
	3) 水を活かし開拓が進められた札幌の都市	3) -1 開拓使の都市づくり技術とフロンティアスピリット
		3) -2 メムが育み発展した産業
		3) -3
	4) 冬季オリンピック札幌大会によって大きく変化したまち	4) -1 国際都市へと札幌を発展させた冬季オリンピック札幌大会のレガシー
		4) -2 オリンピックによってつくられた近代的な都心交通網
		4) -3
	5) 鮮明な四季の移り変わりと季節ごとの風物詩	5) -1 雪を楽しむ暮らし
		5) -2 新緑の中の札幌まつり
		5) -3
	6) 大雪が降る大都市で育まれた特有の都市形成や技術	6) -1 大雪に負けない建築様式
		6) -2 高度な除雪技術と雪に対応した都市形成
		6) -3
札幌文市の身特近徴な歴史	7) -1 愛される古参車両と新型車両が共存する市電	
	7) -2 札幌の経済発展に貢献した元村街道	
	7) -3	

2. 関連文化財群の設定

本構想では、前述の関連文化財群のストーリー案の中でも、特に札幌の歴史文化を物語っており、今後より積極的に保存活用を行っていくものとして、以下を関連文化財群として設定します。なお、関連文化財群のストーリーについては、前述の案を参考にするなどして、今後市民とともに増やしていきます。

● 関連文化財群・ストーリー 案

3) -1 開拓使の都市づくり技術とフロンティアスピリット

—概要—

明治2年に開拓使が設置された札幌。札幌市街地を中心に、開拓使が廃止される明治15年までの13年間に造られた、現在でも見ることができる建物や都市の骨格構造、現在に繋がる都市形成を進めた人物にスポットを当てた関連文化財群。

—ストーリー—

札幌は明治2年(1869年)、開拓使が設置されたことで本格的な都市づくりがはじまりました。開拓主席判官・島義勇が豊平川の広大な扇状地を見て描いた「五州第一の都(世界一の都)」をつくるという壮大な構想が、今の札幌の市街地の発展に繋がっています。開拓使は明治15年(1882年)に廃止されましたが、その時代に生まれ長い時間の中で醸成されてきた歴史文化が市街地に息づいており、札幌のまちの魅力となっています。

島判官は、「コタンベツの丘(現在の北海道神宮の背後の丘)」から真東を望み、現在の南1条通りを東西軸、創成川(当時は大友堀)を南北軸とし、その交点を都市づくりの基点としました。島判官による「石狩国本府指図」には、東西に延びる大通公園が公共的空間として描かれており、また火防線の機能を持たせることで、それより北を官地、南を民地としました。その上で、北西部に官庁・学校、北東部に官営工場、南西部に町屋・住宅、南東部に流通・宿泊施設を設置するというゾーニングの考えを基本に、島判官の後を引き継いだ岩村道俊判官が中心となって、現在の基盤の目の札幌市街地の原型が形成されました。

現在でも、北西部には開拓使札幌本庁舎跡や時計台、北東部には札幌ビール工場などの工場施設が残され、歓楽街として設置された薄野(現在のすすきの)はその位置を留めながら賑わいを見せています。また、札幌建設の基軸となった創成川や大通公園は、役割を変えながら市民や観光客の憩いの空間となっています。

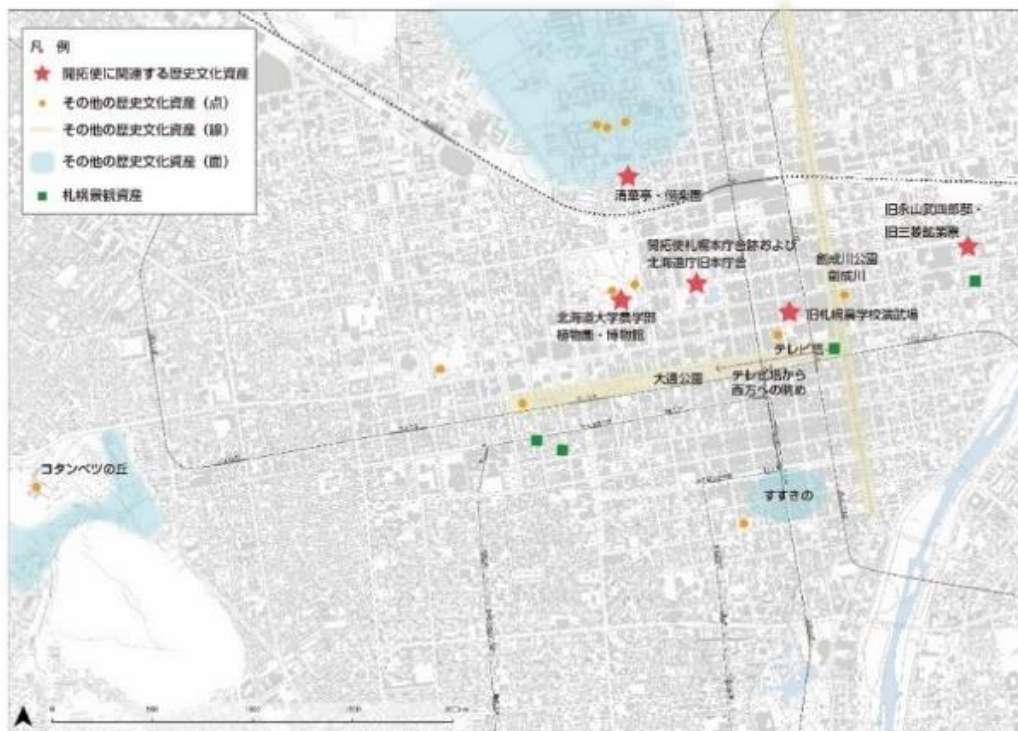
開拓次官(後の長官)黒田清隆はアメリカを中心とした地から、開拓顧問にホーレス・ケブロンをはじめとして、測量・土木のワーフィールド、農業のエドウィン・ダンなど、多くの外国人技師たちを雇い入れて、先進国の農業・工業の知識や経験、専門技術の導入や機械など近代的なものを受け入れて、開拓の革新を図りました。また、明治9年(1876年)、東京の開拓使仮学校が札幌へ移転し、札幌農学校として開校、ウィリアム・クラークを教頭として迎えました。このように、開拓使時代の札幌には多くのお雇い外国人によって、西洋の文化や技術が導入され、今もどこか異国情緒を感じる街並みがあるのはそのためです。

このように、開拓使のフロンティアスピリットが築きあげた都市の基盤や当時の建造物は継承されながら、今日の札幌の街並みの中でその姿と発展の過程を見ることができます。



No	大分類	中分類	小分類	名称
1	動産	無形要素	人物	島義勇
2	動産	無形要素	人物	岩村通俊
3	動産	無形要素	人物	黒田清隆
4	動産	無形要素	人物	ホレス・ケブロン
5	動産	無形要素	人物	ワーフィールド
6	動産	無形要素	人物	エドウィン・ダン
7	動産	無形要素	人物	ウィリアム・クラーク
8	不動産	景観要素	建築物・工作物	島義勇紀功碑
9	不動産	景観要素	建築物・工作物	島義勇判官銅像
10	不動産	空間要素	伝承にまつわる場所	コタンベツの丘
11	不動産	実物要素	建築物・工作物	北海道神宮
12	不動産	景観要素	建築物・工作物	創成橋
13	不動産	景観要素	建築物・工作物	時計台
14	不動産	景観要素	景観	碁盤の目のまち
15	不動産	景観要素	遺跡	札幌開拓使庁舎跡
16	不動産	景観要素	景観	すすきの
17	不動産	藤谷るみ子	自然物	創成川公園
18	不動産	景観要素	自然物	大通公園
19	動産	有形要素	文献・資料	石狩国本府指図
20	動産	有形要素	文献・資料	開拓使各種資料
21	動産	有形要素	文献・資料	開拓使各種文献
・	・	・	・	・
・	・	・	・	・
・	・	・	・	・

■関連文化財群に含まれる文化財の例



■関連文化財群のマップの例

1) -1 先人たちの生業と食を今に伝える丘珠縄文遺跡

概要

H508 遺跡(通称:丘珠縄文遺跡)は、約 25,000 m²と市内最大級の広がりを持ち、周辺の豊かな環境を活かした縄文の「食文化」を感じることができる遺跡であり、札幌の低地部における縄文晩期から続縄文文化、擦文文化へ展開する生業形態の原形を示す象徴的な遺跡といえます。炉跡などの遺構や土器・石器等の遺物が集中して発見され、炉跡の土壌からは当時の生業や食生活を考える上で貴重な資料となる魚骨片や鱗板片、動物の骨片、ヒエ属の種子などが見つかりました。

平成 24 年度から札幌の縄文文化の魅力を発信するために、遺跡を適切に保存し、地域の歴史資源、文化資源、教育資源としての価値を将来に伝えるため遺跡公園の整備に向けた検討とともに、市民ボランティアの参加・協力のもと確認調査(部分的な発掘調査)が進められています。平成 30 年には丘珠縄文遺跡のガイダンス施設「丘珠縄文遺跡体験学習館」と「丘珠縄文遺跡展示室」がオープンし、丘珠縄文遺跡を活用した体験活動や展示をとおして、札幌の縄文の魅力を発信しています。

文化財の例:H508 遺跡(丘珠縄文遺跡)、H509 遺跡、H317 遺跡、札幌市埋蔵文化センター収蔵品、博物館活動センター収蔵品、おかだま縄文ボランティア など

2) -1 アイヌ語地名が今に伝えること

概要

札幌市内の地名や川、山などの名前は多くがアイヌ語に由来しています。アイヌ語に基づく名前があちこちで見られることは、その土地に昔からアイヌの人々が暮らしてきたことを物語っています。地名や川、山などの名前は地域それぞれが持っている自然的背景のもと成立したものや、歴史的な事由によって成立したものなど様々ですが、日常的に使っている地名や地名をひも解くことで、今ではなくなってしまった自然の姿や歴史を想像することができます。

例えば、「豊平=トイ・ピラ=裂ける・崖」、「茨戸=パラ・ト=広い沼(湖)」、「手稲=テイネ・イ=濡るる・ところ」などの地形的特徴に関わる地名、「発寒=ハチャム(・ペツ)=ムクドリが多い(川)」などの動植物に関わる地名などがあります。さらに、「琴似」は「コツ・ネ・イ=窪地になっているところ」という意味であり、サクシュコトニ川(窪地を流れる川のうち、最も豊平川に近い川)は都市化の中で現在は枯れてしまいましたが、偕楽園や北海道大学周辺の川跡では窪んだ地形などに当時の面影をみることができます。その他、偕楽園内にあった「メム=湧水」である「ヌプサムメム=野の傍の泉池」、植物園内にあった「ピシクシメム=浜側を通る泉池」、知事公館内にあった「キムクシメム=山側を通る泉池」なども、現在は枯れてしまいましたが、人工的に池としてメムを再現していたり、メムの地形が残っていたりと当時の様子を垣間見ることができます。

文化財の例:藻岩山、インカルシペ、円山、ユクニクリ、サクシュコトニ川、ヌプサムメム、偕楽園、ピクシメム、植物園、キムクシメム、知事公館、山田秀三、札幌のアイヌ語地名を尋ねて など

3) -2 メムが育み発展した産業

概要

開拓判官島義勇が札幌に描いた夢を基に、既に大友亀太郎が農業用に掘った創成川(旧大友堀)と南 1 条が交わるところを基点とした碁盤の目の街並みとが形成されました。その際、舟運の便だけでなく、豊平川扇状地の豊富な地下水資源も注目されました。メム(湧水)や旧河川等の水の豊富な中心部に、開拓の首府が設置されました(現道庁付近)。また西側には農業・工業試験場を兼ねた偕楽園等、東側には工業局用地(後に製糖・製麦、ビール・酒造工場等が立地)等が、西側と東側のメム及び旧河川跡周辺に設置されました。開発によってメムは消失してしまいましたが、現在もビールや日本酒は札幌の地下水で作られています。

文化財の例: 松浦武四郎、豊平川、扇状地、メム、大友亀太郎、創成川、ビール工場、酒造工場、偕楽園、キムクシメム、ヌブサムメム、ピクシムメム、碁盤の目の街並み など

4) -1 国際都市へと札幌を発展させた冬季オリンピック札幌大会のレガシー

概要

昭和 45 年(1970 年)に冬季オリンピック開催が決定した札幌市は 14 の競技場といくつかの大会運営施設を建設し、それらの多くは今も札幌市民に親しまれる形で残されています。なかでもオリンピックで使用されたコースなどが残るサッポロテイクスキー場や大倉山と宮の森の両ジャンプ競技場は、市内を一望できる観光地として高い人気があります。また真駒内の屋内外競技場はアリーナやスタジアムとしてスケートの国際大会やマラソン大会、ライブイベントなどの会場として盛んに使用されています。またオリンピック村に建設されたサービスセンターは、大会後には真駒内緑小学校校舎として、閉校後には子どもを中心とした連携・交流の場を提供する「まこまる」として、その使用方法を変えながら市民生活に溶け込んでいます。

大会関連施設だけではなく、札幌市営地下鉄やさっぽろ地下街、民間企業の社屋なども整備され、これらは札幌のまちの姿を大きく変化させました。札幌オリンピックでの都市開発で生まれた資本は、今も札幌市民にとって欠くことのできないものです。

文化財の例: 大倉山ジャンプ競技場、宮の森ジャンプ競技場、サッポロテイクスキー場、真駒内セキスイハイムスタジアム、真駒内セキスイハイムアイスアリーナ、月寒体育館、美香保体育館、札幌市営地下鉄(南北線・東西線・東豊線)、さっぽろ地下街(オーロラタウン・ポールタウン)、地域暖房、ニトリ文化ホール、まこまる、真駒内曙中学校、UR 五輪団地 など

5) -1 雪を楽しむ暮らし

概要

年間6メートルもの降雪がある札幌ですが、190万人都市でこれほど降雪があるのは世界でもめずらしいことです。都市の中の大雪は市民生活にとって課題となることも多いものの、札幌市民は昔からその雪を楽しんで暮らしてきました。特に、自然の中で雪を楽しむ冬登山やスキーは、札幌農学校のスイス人ドイツ語講師ハンス・コラー先生によって広められ、明治のころから市民に広まっていきました。その後現在でも藻岩山スキー場やサッポロテイネ、札幌国際スキー場など施設も充実し、市民が身近にスキーを楽しんでいます。また、「さっぽろ雪まつり」は、地元の中・高校生が6つの雪像を大通公園に設置したことがきっかけで始まり、大通公園をメイン会場としながら今では国内外から観光客が訪れるお祭りとなっています。

文化財の例: 藻岩山、円山、手稲山、荒井山、スキー、ハンス・コラー、札幌国際スキー場、盤渓スキー場、サッポロテイネ、雪まつり、市民雪像、大通公園、雪景色 など

5) -2 新緑の中の札幌まつり

概要

明治5年(1872年)に札幌神社(現北海道神宮)の例祭が6月15日に決定しましたが、その年は幣帛の到着が遅れたため、7月7日岩村判官参列の元、取り行われたのが札幌まつりの始まりです。明治10年(1877)に札幌の人々から神幸を願う声があり、翌年に神輿が巡回したのが、札幌まつりの渡御の始まりでした。その後、現在まで毎年開催されており、新緑に彩られる街中を山車が練り歩く姿や中島公園、北海道神宮での見世物小屋や出店は夏の風物詩となっています。

文化財の例: 札幌まつり、岩村判官、北海道神宮、北海道頓宮、サーカス小屋、創成川河畔、中島公園、山車、お化け屋敷、芸妓 など

6) -1 大雪に負けない建築様式

概要

北海道住宅供給公社が1960年代を中心に、分譲住宅として供給した規格型コンクリートブロック造の家(北方圏型規格住宅)。目を引く急角度の三角形屋根から「三角屋根」の通称を持ちます。

昭和28年(1953年)制定の「北海道防寒住宅建設等促進法」により、コンクリートブロック造住宅が法的に推奨されたことを背景に、道内各地のニュータウンで規格住宅が導入され、三角屋根は高度経済成長期における北海道の景観の一つとなりました。

その後、当時のニュータウンが生まれ変わる中、三角屋根は姿を消し続けていましたが、手稲区の星置地区には当時の三角屋根の住宅がまだ数多く現役として活躍している姿が見られます。また、三角屋根住宅をリノベーションすることで、現在のライフスタイルにあった住宅へと変貌を遂げています。

文化財の例: 北海道防寒住宅建設等促進法、コンクリートブロック造住宅、三角屋根が並ぶ景色、星置地区、ツララ落とし、二重窓、無落雪屋根 など

7) -1 愛される古参車両と新型車両が共存する市電

概要

昭和 40 年ごろをピークに路線の縮小をしてきた市電ですが、平成 25 年(2013 年)には新型低床車両ポラリスが導入され、平成 27 年(2015 年)には、ループ化による路線延伸が行われたことで、札幌の顔としての印象を高めています。現在でも昭和 30 年代に制作された車両が現役で走り、街行く人や乗車する人を懐かしい気持ちにさせてくれます。積雪地特有の車両としてササラ電車があり、冬季のスムーズな運行の立役者として活躍しています。一方、新型低床車両ポラリスやシリウスも新たな顔として活躍しています。古参車両を大切にしながらも新型車両が走る背景には、車両メンテナンス技術と知識を持つ技術者の支えがあります。

文化財の例:市電、M100 形、M210 形、8500 形、交通資料館、電車事業所、ループ化、ササラ電車、ポラリス、シリウス、事業所職員、車両メンテナンス技術、名古屋電気鉄道、10 形 など

7) -2 札幌の経済発展に貢献した元村街道

概要

ななめ通り（旧元村街道）は、慶応 2 年に大友亀太郎が着手した札幌のまちづくりの原点ともいえる歴史ある通りです。
大友堀と同時期に整備され、石狩と札幌を結ぶ流通の基幹として、札幌の経済発展に貢献しました。古くから開発され、街道として活用したため、周辺には札幌最古の寺院である妙見堂や道内最大の山門を持つ大覚寺など歴史ある建物が残されています。
また明治期には、帝国製麻や札幌麦酒会社をはじめとする官営・民営工場が立ち並び札幌の官と民の経済発展を支えた場所でもあります。
現在はななめ通りと呼ばれていますが、碁盤の目の街並みが整備される前に開発され、幕府の開発から開拓使、明治期の経済発展までの歴史を偲ぶことができます。

文化財の例:大友亀太郎、開拓使判官・島義勇、元村街道(ななめ通り)、札幌村、札幌村郷土資料館、帝国製麻、札幌麦酒会社、大覚寺、妙見堂、 など